

# 歴史はおもしろいのか

経済学部 准教授 松沢裕作まつざわゆうさく

歴史の研究をしています、と自己紹介する。「歴史なんてやって何の役に立つんですか？」などといきなり言われることは滅多になく、「ああ、歴史、おもしろいですよね」とか「歴史は大事ですよね」とかいう答えが返ってくる。その先に、歴史のおもしろさや重要性について、その人の見解の披瀝ひれきが続くこともある。私は笑顔であいづちを打っているけれども、なんとなく釈然しやくぜんとしない。

歴史の研究者は「史料」を読む。「史料」とは、基本的に研究対象となる同時代人が書き残した文献である。昔の人たちの生の声に触れる。さぞかし興味深い事実が書き連ねてあるのだろうと思われるかもしれない。しかし、いきなり史料を読み始めて「ああおもしろいなあ」などと思うことは稀である。

前世紀の末、埼玉県埼玉県の県庁文書を使って卒業論文を書こうと思った私は、浦和市浦和市（現さいたま市）にある埼玉県立文書館を訪れ、明治初期の簿冊を何冊か閲覧した。そこで出てきた史料は、地方税の費目間流用に関する細々とした問い合わせであった。いったいこれをどうすればよいのか。県庁文書とは、要するに「書類」である。現在、私たちが学校で、役所で、日々作成し受け取る「書類」たちのことに思いを致せば、それがそんなにおもしろいものであろうはずもない。

とはいえこれをなんとかしなくては論文は書けない。何か意味があるはずだ、と自分に言い聞かせながら簿冊を繰る。かすかな繋がりを見つげながら、多分間違っていない、と思ったところで論文を書く。そんな日々を続けて15年が過ぎた。歴史が書かれるためには、一見すると「おもしろくなさそうな」史料でも残されていないければならない。

学部生の私私が手に取った簿冊を含む「埼玉県行政文書」1万1259点は、2009年、国の重要文化財に指定された。廃棄することなく、それを守り伝えた人たちに深い感謝の念を感じずにはいられない。



重要文化財「埼玉県行政文書」のうち  
秩父事件関係文書（埼玉県立文書館蔵）

談話室  
教員によるエッセイコーナー